



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山村暮鳥と石原純
Author(s)	竹本, 寛秋
Citation	雲, 17, 80-85
Issue Date	2012-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50051
Type	journal article
File Information	2012178085.pdf



山村暮鳥と石原純

竹本 寛秋

一 はじめに

山村暮鳥と石原純¹、この二人の名前を並べることには、違和感を持つ方も多いかもしい。この二人は、生前出会ったことはない。また、山村暮鳥は、短歌も作っているとはいえず、石原純の提唱する口語の自由律短歌、石原の言うところの「新短歌」運動と直接の関わりはない。

しかしながら、大正十三年十二月の暮鳥没後、いち早く石原純は、『日光』誌上に「山村暮鳥氏の短詩」を書き、石原の文脈に引き寄せつつ、山村暮鳥の詩集『雲』を論じている²。石原の暮鳥への言及は、昭和七年『短歌講座 第四巻』³でもなされ、石原の論にとって重要な位置を山村暮鳥は占めている。

さらに、石原の短歌論に、川路柳虹の「新律格論」を関わらせるならば、大正末期における「詩における日本語」という大きな問題系の中に、山村暮鳥の詩集『雲』が浮上してくる。

本稿は、山村暮鳥没後における、詩集『雲』への言及、『雲』の作者としての「山村暮鳥」への言及を通して、山村暮鳥という詩人が、その後に与えた影響の新たな一面と、その広がりをも明らかにする試みである。

二 石原純の山村暮鳥『雲』観をめぐって

石原純は、大正十四年二月に書かれた「山村暮鳥氏の短詩」⁴において、自身の主張する「短歌」の目線から山村暮鳥の詩集『雲』を眺め、「はゝあ、こゝにも私の求めようとするものが自然に芽をふいてゐるな」との感慨を漏らす。石原の「私の求めようとするもの」は、単純に言ってしまうならば、「純真な心のあらはれ」としての表現であり、石原は詩集『雲』に「銜気や気取りや、その他の作爲が塵ほども入つてはゐ」ないことを評価する。

その上で、自身の「短歌」における問題意識に『雲』を引き寄せ、暮鳥の「春の河」を引用しつつ、もし旧来の歌人がこの情景を古典的短歌にまとめ上げようとする場合、旧来の短歌に収めるための「翻訳」「制軛」が素朴な感情をゆがめ、たわめ、不自然とすることを問題視する。石原にとって、暮鳥『雲』の詩篇は、「詩」として発表されているが、石原の目指す「短歌」の理想的な表現の形であると称揚されるのである。

石原は、「雲」を取り上げつつ、あり得べき「短歌」はこの境地を目指さねばならないことを言挙げする。

雲

丘の上で
としよりと
こどもと
うつとりと雲を
ながめてゐる

石原がこうした暮鳥の詩を、自身の短歌観に接続するのは、それらが「素朴」ながらも「不足」なく一篇を構成し得ている点であり、「無駄」なく「引き締められている」点である。短歌において、「自由」を主張するならば、真つ先に、「短歌」を「短歌」たらしめるものは何か、という問題が突きつけられるわけだが、石原は、『雲』を引き合いにだしつつ、形式がいかに長く、音数も自由であったとしても、「十分に引き緊つたものである」ことで「短歌」的な「特質」を満たすと述べるのである。

さて、この、いささか我田引水的な石原純の山村暮鳥理解については、すぐさま反論が現れる。八代東村は、「石原氏が主張し解説して居られる「現代語歌」の研究の資料といった形で取扱はれてゐるのを不満に思つた」と述べ、暮鳥の詩が、石原の論の素材として使われていることへの不快感が示されている。

しかしながら、その八代の『雲』評価を見ていくならば、むしろ見えてくるのは、石原の評価言語との共通性である。「詩の形は極めて自由自在でありながら、些の無駄もない。何の奇もなく、何のかざりもない。平々淡々たる中に一派の哀愁があり、法悦がある」と、ここで称揚されるのは、西洋起源の「自由詩」を日本人として完全に消化吸収し、「俳句」的な境地に高めたことなのである。

三 「くるし」み、「捨」てることだどり着く〈単純〉〈東洋〉〈童心〉

暮鳥の生涯を題材とした、中村恭二郎の「暮鳥なほ生く」の一節は、山村暮鳥の人生を端的に振り返った詩句といえる。

人の世の一切の苦しみを通つた後に
洗ひ出された素裸の純一無雑の暮鳥の藝術。

山村暮鳥を、詩集としての変遷を中心としてまとめるとき、『三人の処女』―『聖三稜玻璃』―『風は草木にささやいた』―『雲』を時系列上に置き、それらに触れながら『雲』に至る道筋を描いていく―これは、現在まで続く、山村暮鳥評価のスタンダードな手法の一つである。

暮鳥の生涯にわたる詩業を通覧できる初めての書籍といえる、昭和三年『暮鳥詩集』⁷刊行時に書かれた、外山卯三郎の評は、「暮鳥その人に就いては知つてゐない」と言いながら、『三人の処女』『聖三稜玻璃』を「表現技巧」の目につく「修業時代」と位置づけ、『風は草木にささやいた』以降の暮鳥を「技巧をふりすてたところに人としても又作としても大きさが出てゐる」と位置づけていく。その上で、『雲』は、山村暮鳥という詩人が「完成」されたことを示す詩集として位置づけられるのである⁸。

暮鳥の生涯を遡及的に見ていくなれば、こうした、「技巧詩人」から「技巧」を捨てた「人生詩人」へ、そして、その地点をさらに超越した「東洋思想の境地」へ、という物語は、非常に作りやすいものとしてある。

『聖三稜玻璃』の価値を称揚し、暮鳥詩碑の建立においても『聖三稜玻璃』の詩に最後までこだわった萩原朔太郎ですら、この語り口の圈内から逃れることはできていない。朔太郎は『聖三稜玻璃』と『雲』を、山村暮鳥の「子供らしさ」において並列にならべ、『聖三稜玻璃』を「奇異なる幼児の心像、稚児の夢に見る素朴な世界の表象」と表現し、『雲』の世界を「子供のやうに大自然を観照」する「山中の老仙、白髪童顔にして稚児に似たり」と表現する。その上で、『雲』を「東洋的の気分」と接続し、「和歌俳句等の国粹詩歌とも、情景相通ずる詩集」であると評するのである⁹。

晩年の暮鳥に親しく接した人物であり、「暮鳥会」の成立に深く関わる存在となる津川公治の暮鳥評価に現れるキーワードも、「童心」「幼稚」「単純」である。津川は、暮鳥の詩を「だれにでも作れさうであつて、しかもあなただけにしか作れない詩です」といい、「凡そ単純化するといふことは偉大な力を要する仕事です」と述べる。そして行き着くべきは、「東洋の自然といふ幽邃な単純さ」なのである¹⁰。暮鳥没後の大正十三年から、昭和初年代だけを見ても、こうした暮鳥評価の物語は、枚挙に暇がないほど存在している。

山村暮鳥の生涯を、その刊行詩集によって振り返るとき、『聖三稜玻璃』という先鋭な技巧から、「風は草木へささやいた」の平明な自然への視線の移行、そして達観した『雲』の境地へとというシークエンスは、「詩風」の変遷の物語と、「詩人」の成長の物語が分かちがたく絡み合い、流通していたといえる。

そして、ここで注目しなければならないポイントは、単なる〈単純〉ではなく、〈技巧を通し、それを捨てた上での単純〉であること、単なる〈東洋〉ではなく、〈西洋詩から出発し、終着点として回帰した場所としての東洋〉であること、単なる〈童心〉ではなく、〈激しい苦悩を通過した上に現れる童心〉であることである。山村暮鳥の創作の時系列は、この三つの時系列すべての交点として読み替えられる要素を持ち合わせ、『雲』は、その三つの物語の終着点に位置づけられたのである。

四 山村暮鳥『雲』―石原純「短歌の新形式」―川路柳虹「新律格の提唱」をつなぐもの

さて、問題を石原純に戻す。石原純は、なぜ、山村暮鳥『雲』に着目したのか。そこに、石原自身の問題意識があるのはもちろんである。石原は、現代の思想が、万葉集時代に比べ、遙かに複雑になっている上、日本の現代の国語に漢字起源の語彙が混入し、単純素朴に短歌という形式を成立させることが、現代語を用いては困難になってきていることを問題視している。その上で、石原がとりあえず推奨する解決は「私たちは現代語をもつてつくる短歌の韻律並びに形式を先ず暫く全く自由に解放しておきたいのです」というものである。

これは、一見、本質を決めることなく実作がなされることを放置するという、無責任な態度と見なされるかも知れない。しかし、石原は、とりあえず、現在作られるものを作られるまま放置するという態度によって初めて、将来における「短歌」の表現が「自然に健全」に発展するのであり、それを実現するために、各歌人の個々の努力が必要である、と結論づける¹¹。その際に重要な態度として持ち出される比喩が「子供」である。「私たちは自らの前途にどんな収穫があるかをも全く知りません。私たちは放たれた子供の心になって之を探し求めればいゝのです」と石原は言い、「童謡」を手本としつつ短歌を改革する必要を説く¹²。

さて、このような問題意識を持つ石原にとって、山村暮鳥の『雲』の表現が、彼の理想とする「短歌」の経路上に見えたのである。石原においては、現代語を用いた、「自由で素朴な表現」の発露として『雲』があり、それは「古典的短歌」が、「短歌」形式を成立させるためだけにとらわれている「感情の翻訳」、「形式」への当てはめによる「澁澗とした感情」のゆがみやたわみから脱したもの、「自然」に生まれ育っていくべき将来の「短歌」、延いては将来の「日本語」の理想的な方向性を示す萌芽的表現として浮上したのだ。

〈収束へ向かうための放置〉という観点から、視点を転じるならば、川路柳虹の「新律格」¹³の主張は、フェーズは違うものの石原の発言と同一の発想を共有している。川路柳虹の「新律格」は、現代詩における「逆行」として、否定的にとらえられがちであるが¹⁴、川路の論理を丁寧に読み解けば、川路の試みは、「口語詩」運動が現在までに残してきた成果から、自然に形作られた「口語詩の音律」を「日本語の自然」から読み解く試みであることがわかる。川路は、明治三十年代後半に「口語詩運動」が提唱されてから、既に二十年近く経ったのであるから、その間に作られた実作は、「現代日本語」で作られている限りにおいて、自然となにがしかの法則を持っているはずであり、現代日本語が自然に醸成してきた「口語詩の音律」の法則性を明らかにする試みとして、「新律格」を提唱している¹⁵。だとすれば、石原純のビジョンは、未だ存在しない法則性を将来に向けて期待し、投擲する試みであり、川路柳虹の試みは、現在まで作り続けられてきた「口語詩」を歴史として捉え、「そこには自然に形成されているはずの法則性があるはずだ」と隠された法則性を見

出そうとする試みであるといえる。そうであれば、この二人の試みの違いは、未来に視線を投げるか、過去に視線を向けるかの方向の違いだけでしかない。石原にとって、山村暮鳥の『雲』は、将来の「日本語」の出発点提示すべき表現としてとらえられたのである。

山村暮鳥の『雲』という詩集を、西洋由来の新体詩の血脈を受け継ぎつつも、〈技巧〉を捨て、〈童心〉に帰り、〈東洋〉的〈単純〉へ行き着いた詩集として読むことは非常にたやすい。しかし、山村暮鳥を「どう読むか」は、そうした物語をはるかに超えた問題を中に含んでいる。

山村暮鳥の没後、昭和初期までだけを考えてとしても、茨城を中心とした暮鳥周辺の人々、『日本詩人』を中心としたいわゆる中央の詩壇の人々、さらに、萩原朔太郎や室生犀星といった、山村暮鳥の詩人としての初発期をもにした人々、延いては、春山行夫や岡本潤といった新しい詩の担い手たち、多様な読み手が山村暮鳥を、それぞれの読み方で読んでいたのであり¹⁶、それらの読みの振幅は非常に大きい。現代に至る論者まで射程に収めていくなれば、さらに大きな広がりがある。

そうしたなか、石原純は、山村暮鳥の詩集『雲』を、「詩」と「短歌」を架橋するものとして読むという方法を通して、自らの「新短歌」の一つの原型を『雲』に見出したのである。

- 1 石原純（一八八一〜一九四七）は、日本の理論物理学者、歌人。大正十一年アインシュタイン来日の際には、講演通訳をつとめる。雑誌『科学』の初代編集主任としても知られる。歌人としては、「自由律短歌」を主張し、その理論を精力的に発表した。
- 2 石原純「山村暮鳥氏の短詩」「日光」大正十四年二月（『アイデア』大正十四年五月に再録）
- 3 『短歌講座 第四卷』改造社 昭和七年八月
- 4 石原、前掲「山村暮鳥氏の短詩」
- 5 八代東村「詩集「雲」「日光」大正十四年三月
- 6 中村恭二郎「暮鳥なほ生く」「地上楽園」昭和二年五月
- 7 山村暮鳥『暮鳥詩集』厚生閣書店 昭和三年三月
- 8 外山卯三郎「詩書管見——「暮鳥詩集」を読む——『民謡詩人』昭和三年五月
- 9 萩原朔太郎「山村暮鳥のこと」「日本詩人」大正十五年二月
- 10 津川公治「イソハマの詩聖逝く」「更正」大正十四年一月
- 11 石原純「短歌の新形式について」「週刊朝日」大正十二年十一月十日
- 12 石原純「短歌の新形式を論ず」「日光」大正十三年四月
- 13 川路柳虹「新律格の提唱」「日本詩人」大正十四年三月、川路柳虹「詩に於ける内容立の否定——新律格再論の序言」「日本詩人」大正十五年八月
- 14 角田敏郎「川路柳虹の詩論——口語自由詩における位置——『学大国文』昭和五十一年二月
- 15 川路柳虹の「新律格」についての詳細な検討は、別稿を期したい。
- 16 春山行夫は「詩壇レビュウ 批評的尺度の批評的価値について——井上康文氏に——（『詩神』昭和四年八月）において、井上康文の暮鳥評価を痛烈に批判しつつ、山村暮鳥への評価は「平易な作風だけで、あまりに通俗な詩人に看過させる危険がある」と言い、「暮鳥の

詩が僕たちを惹きつけるのは、彼のボエジイの故である」と述べている。こうした、春山の暮鳥評価をはじめ、昭和に向かって、過去の詩人を評価していく中で、どのように山村暮鳥の評価は変遷していったのか、より詳しい検討と考察が必要となろう。同号には、岡本潤「詩を生理的に見る」も掲載され、岡本潤による山村暮鳥観の一端を伺うことができる。